

研究ノート

「私」という自己表現を引き出す音楽による ノンバーバルコミュニケーション

園田 和江¹

Nonverbal Communication in Music to Notice “I” and Self-Expression

Kazue SONODA¹

キーワード 私, 音楽, 日本語, 哲学, Martin Buber, エンパワメント

Keywords: I, music, Japanese, philosophy, M.Buber, empowerment

1 はじめに

音楽療法士としての活動を行い今年で10年目になる。私が思うに音・音楽を使用した活動である音楽療法は、障害の有無に関わらずノンバーバル(非言語)コミュニケーションにより対象者ひとりひとりのエンパワメントを強め“生きる力”を高める一手法である。本研究ノートでは音楽療法において音を出すことの意味、ノンバーバル(非言語)コミュニケーションという自己表現について「私」という視点から捉える。具体的には内外の研究、とりわけマルティン・ブーバー(Martin Buber)の諸説に依りながら考察する。

2 音楽・日本語・哲学における「私」

2.1 音楽における「私」

「私」が音を出すことは「私」が自己決定をした結果が外の世界へ現れた瞬間であり、ノンバーバル(非言語)コミュニケーションの始まりである。それは音を出すことを「私と私」の内言により決め、どのタイミングで最初の一打の音を出し、どこまで音を出し続け、また止めるのかという自己決定である。例えば置かれているタイコはそのままでは決して鳴ることはなく「私」が関わることによつてのみ音が出る。

2.2 音楽と「私自身」

個人的なことだが、私は3歳からピアノを習い小学校5年生から市立合唱団の団員となり高校生の時に吹奏楽部に

入りフルートと出会った。社会人になってからは市民吹奏楽団や市民オーケストラでの演奏活動を続けながら音楽科に入学し専門的にフルートを勉強した。現在はKフィルハーモニーオーケストラのフルート奏者として演奏活動を続けている。

音楽を勉強する者なら誰もが経験することであるが、練習曲や演奏会での発表曲に取り組んでいるときは「私」の中で内言による対話を繰り返している。演奏会当日の、その演奏においても内言は繰り返されている。

所属するオーケストラでは練習を月に3回行う。指揮者の指揮棒が下りる、その瞬間においても筆者はどこで息を吸って、どのような腹筋の状態、どの時点で音を出すかということに意識を集中させている。曲が始まり、それぞれのパートがお互いの役割を全うすることで一つの曲が完成される。そして曲が演奏されている間も内言は繰り返されている。それぞれの楽器の音はその結果が表出された自己表現であり、お互いがそれぞれの音型を演奏しながら曲を作り上げていく。

オーケストラでは、演奏者はそれぞれの自己表現という役割を担っている。それと同時に全体の曲のイメージを完成させる過程においてソロの楽器を引き立たせるために他の楽器は音を抑えたり、大切なリズムを引き立たせるために、その箇所をより強く演奏したりする。交響曲において作曲者が意図しているイメージ、指揮者のイメージ、「私」

¹ 891-0197 鹿児島市坂之上 8-34-1 鹿児島国際大学大学院福祉社会学研究科

Graduate School of Welfare Society, The International University of Kagoshima, 8-34-1 Sakanoue, Kagoshima 891-0197, Japan

2011年5月31日受付, 2011年8月4日採録

が持っているイメージは始めから必ずしも一致しない。交響曲は作曲者によって全体のイメージが完成されているものだが、それが演奏される時代における解釈、また指揮者の解釈によって曲のテンポや強弱も変化する。そして演奏者自体の実力にもよるが、表現方法にもそれぞれの違いがある。また自分のイメージした表現や気持ちを演奏したつもりでも、それが客観的に伝わっていない時がある。その時は自分の主観的なイメージを自己表現するより、客観的なイメージに合わせて、より伝わる表現方法を模索する。演奏者は自分の気持ちをどのように表現するかということについて、いつも深く考えている。それは音の表現が演奏者同士のコミュニケーションに終わるのではなく、その音楽を受け取る側の観客に伝わる、双方向のコミュニケーションにならなければ意味がないからである。

これらのことからオーケストラの団員ひとりひとりの「私」による音の集まりがオーケストラ全体として演奏者同士の異なる音によるコミュニケーションとなり、それが演奏会に集まった他者としての観客をも巻き込んだコミュニケーションへと発展している。

2.3 日本語における「私」

日本語において「私」という存在は主張されない「主語」である。宇津木によれば『私』を言わないまま私を表出することができることは、例えば日本語の感情形容詞のあり方を見てもよく分かる。『嬉しい』『悲しい』『愛しい』『憎い』『うらやましい』を接尾辞や助動詞などを付けずに言い切りで用いた場合、主語と解されるのは『私』である。つまり、『嬉しい』と言えは『私』が嬉しいことであり、対比や強調といった特別な理由がなければ、あえて『私は嬉しい』などとは言わない。また『うらやましい』に関しても、『私はうらやましい』などと言わずともうらやましい思いを抱えているのは原表主体である『私』であると一般に解される」(宇津木2005: 17)としている。

また、日本語において主語が外の世界と混然一体となっている。「私」の言いたいことの多くは述語に含まれ、あえて「私」を言語化しなくても自己の表出を行ない、話し手と聞き手が一体化している。「私」と言わない「私」を上田は「私たちは日本語で言う場合に自然にたとえば『鐘の音が聞こえる』といいます。……英語でもドイツ語でもごく自然な言い方では『私は聞きます、鐘の音を』でしょう。……『私』が経験の優越した統一点になっているということだと解釈することが許されるでしょう。それに対して、私たちが直接の経験をそのまま日本語で言う時には、『鐘

の音が聞こえます』。……このように言う経験は、『私は聞きます……』とはじめから言う経験の仕方とは少し違ったところがあると思います。まだ『私』と言わない意識に鐘の音が響いています。それが『鐘の音が聞こえます』ということです。……“私が”聞いているのではなくて、『鐘の音が聞こえている—それが“私で”ある』(述語的統一)、そういう『私』ということが出来ます。その際その『私』は最初から『私は……』とは言いません。鐘の音が響いている、そのことがそのままあらわになっている場所、意識としての『私』です。」(上田1991: 326-327)と述べている。

他方、金谷は『日本語は敬語があつて主語がない』の中で言語学者である池上の川端康成『雪国』の冒頭部分での考察を取り上げている(金谷2010: 28)。「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」という文を読んで日本人の読者が浮かべる情景は「“私”は車中に座っており、長いトンネルの暗闇を抜けると、そこには一面の銀世界が広がっていた」というように時間の経過と共に場面が変化していくものと捉えている。一方、英訳の「The train came out of the long tunnel into the snow country.」について、数人の英語話者が思い浮かべる情景を絵に描いた。英語話者らの「私」の視点は“汽車の外”にあり全員が「上方から見下ろしたトンネルの絵」であった。

このように日本人は会話において「私」である主語の存在を無意識のうちに言い、その会話にある「場所」を重視しながら話を進めているにも関わらず、それでもお互いの意思疎通を図っているのである。ストレートな自己表現や自己主張が苦手な国民性は、日本語自体の構造に因るものが大きい。また、心身に何らかの障害を抱えていると複雑な構造である日本語という言語を使用するコミュニケーションにおいて「私」の表出は難しく、自己表現の手段として困難さを伴う。

2.4 哲学における「私」

この「私」という存在についてドイツの哲学者マルティン・ブーバー(Martin Buber: 1878-1965)は『Ich und Du』(1983)の冒頭部分「Das eine Grundwort ist das Wortpaar Ich-Du. Das andre Grundwort ist das Wortpaar Ich-Es」(Buber 1983: 4)において私たちの生きている世界での根幹にある言葉として「我—汝」「我—それ」を挙げている。これは「私」が「私」と対話を繰り返し自分自身を理解する「汝」(私が呼びかけている私の人格)ということ、また「私」の周りに存在する他者を自分と違うものとして認識しながら「それ」を「私」との関係性として捉えている。また、人と人との

真の生きている相互関係について「……daß sie alle zu einer lebendigen Mitte in lebendig gegenseitiger Beziehung stehen und daß sie untereinander in lebendig gegenseitiger Beziehung stehen. Das zweite entspringt aus dem ersten, ist aber noch nicht mit ihm allein gegeben. Lebendig gegenseitige Beziehung schließt Gefühle ein, aber sie stammt nicht von ihnen. Die Gemeinde baut sich aus der lebendig gegenseitigen Beziehung auf, aber der Baumeister ist die lebendig wirkende Mitte.」(Buber 1983 : 43)と述べている。これは生きている中心(汝)に対して相互関係を結びながら、他者との生きている相互関係を結ぶことが真実の共同体(Gemeinde)の姿だとしている。そして共生の構造が生まれる場所をブーバーは「間」の領域と述べている。「間」とは「ある存在者が他の存在者を、他者として、この特定の他の存在者とみなし、両者に共通の、しかし両者の固有の領域を超えた領域において、他の存在者と交わることの中にそれ[人間世界の固有性]がある。稲村によれば「人間としての人間の実存と共に指定され、しかも概念的にはまだ把握されていないこの領域を私は間の領域と名づける。……なぜなら、間は個人の魂や周囲世界と違っていかなる単純な連続性も示さず、むしろ人間的出会いの程度にしたがって、その都度新しく構成されるためである。……」(稲村2006 : 2-3)ということである。またブーバーの「間の領域」について稲村は「この間の国は、我と汝が関わる『真の現実』である。人間にとっては、主観内に構想された観念的世界も、また没意味的な物質的世界も共に真の現実と言えないことをわれわれは体験的に知っている。人間はそれらの世界を超えて、他者との対話的關係のなかへ出かけてゆくところに、自己の存在の確証を得てゆくのである。この間の領域に関与することによって人間は、現実性をおびてくるのであり、本来の人格性を得てゆくのである。この間の領域は空虚な幾何学的空間ではなく、人格的關係に満たされたいわば人間的空間と表現できよう。」(稲村2006 : 3)と述べている。

これは毎回の音楽療法におけるセッションにおいて、対象者同士が新しい出会いをノンバーバルコミュニケーションによって繰り返し行っていることと合致する。「私」の音を出すことが決定されるまでの時間において「我と汝」の会話が行われ「私」が表出された瞬間に「間の領域」となり、「私」を受け止める他の参加者と「共生の構造」を取り、お互いが自己の存在の確証を得ながら人格的關係に満たされた「間」のコミュニケーションが存在している。

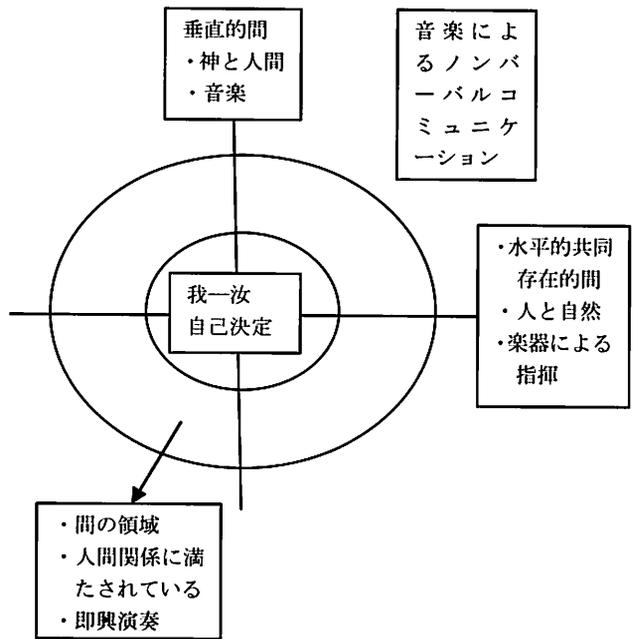


図1 「我—汝」「間の領域」「音楽」の関係図
稲村(2006)を基に園田作成

3 「私」の自己表現・自己決定

自己決定はいつも簡単に出来そうであるが音を出すことは心身に何らかの障害があると1つの音を外の世界に表出することはとても困難である。「私」が音を出すことになるまでの過程を音楽療法士(以下MT)である筆者のこれまでの10年間の実践の中から、本学社会福祉学部児童相談センター(以下センター)での聴覚障害児、学習障害児、知的障害児、自閉症児のセッションから2つの事例を挙げる。

1) 普通学級に通学していたAさん: 13歳/軽度の知的障害(園田・蓑毛2008 : 16-19)

Aさんは中学1年生で友達との会話についていけない、友達に強く言われたことに不本意ながら従ってしまうことなど学校生活に困難さが伴うためセンターを親子で訪れた。小学校時代の学校関係者から知的な遅れについて危ぶむ声があったがAさんの両親はそれについて対応することはなかった。両親の期待に応えるためにAさんは先生や友達に「私」を出さずに小学校時代を過ごした。中学校に入り勉強が難しくなり、また、思春期を迎え友達関係も複雑になってきた。

セッションにおいてAさんの得意なことは模倣の活動であり、苦手なことは1対1のコミュニケーションであった。MTに促されてAさんがフロアタム(低音で良く響く打楽器、サッカー場での応援等にも使われる)を叩き始めてもMT

とアイコンタクトは取れず、落ち着かない態度で上半身が大きく揺れた。Aさんが実感を持って連打が出来ずにいたのは、自分が音を出すことで「私」が外の世界に明確化され自分自身が「私」に向き合うという「私一汝」の会話を繰り返し行うことになるからであった。今まで「私」を出さずに埋没化させることで周囲と合わせてきたAさんにとって、フロアタムを叩くという行為は一番避けたいものであった。また連打後に演奏の終結の合図である、最後の1打を叩くことも出来なかった。「私」が演奏を止めようと自己決定をしない限り音は鳴り止まない。Aさんが困難さを抱えながら中学1年生まで特別支援教育を受けていない点から、1対1のコミュニケーションが取れるまで時間が掛かることになる。

2) 特別支援学校に通うB君：6歳／自閉症(園田・養毛 2010)

音楽療法を受けさせたいという両親の強い希望からB君は幼稚園の年中時からセンターに通う。自閉症であり、初めての場所や人に慣れることが難しく当初は大学の入り口からセンターまで大声をあげて泣いていた。コミュニケーションのやり取りが言語では難しかったのでハンドドラムによる挨拶で「こん・にち・は」「さよ・う・なら」と3打で叩くことで言語に意味づけを行うことから始めた。両親のサポートがあったので自宅でも「いた・だき・ます」「ごち・そう・さま」と手を叩きながら行うことをアドバイスした。その後母親から「食事の前後に手を叩きながらはつきりと言葉を出すようになりました」と聞いた。言葉を発することに意味付けがあればB君は状況に応じた言葉を言えたのである。リズムを対応させた結果、発語に意味付けがされ挨拶だけではなく絵カードを見ながらリズム打ちと共に言葉が出て、今、何に注目するのかという落ち着いた態度と集中力が出てきた。

楽器演奏では楽器の配列通りに父親と一緒に演奏するが最後のフロアタムの連打が出来ずに、途中でマレットを置いてしまうので最後の終わりの合図である1打を叩くことがない。Aさんの例では「私」を埋没してきたことから「私」を明確化することが出来なかったがB君の場合は「私」の音を出すことの意味が分からなかった。また、他者への興味が少なかったことと双方向のコミュニケーション体験が少なかったために自信を持って連打することが出来なかった。それでもB君は視覚的に特徴のある楽器が好きで演奏を嫌がることはなかった。毎回のセッションでは楽器配置と動きを一致させ視覚に訴えたことにより曲の進行

を分かり演奏に自信が出てくる。1年後には「もう一度する？」とのMTの問いかけにB君が手をあげて合図し「もう一度やりたい」という意思表示をする。楽器演奏の最後ではシンバルを大きく1回鳴らし「止める」という自己決定が出来るようになったことで「私」の意識が芽生えてきたのである。

4 「私」と「エンパワメント」

私の考察によれば生理的指標から捉えた高齢者デイサービス(男性13名、女性22名、平均年齢80.9歳)での音楽療法の効果をもたらした要因は、対象者同士のエンパワメントによる深いコミュニケーションであった。(園田2010:39)(研究前後でのアンケート調査により“音楽療法ではコミュニケーションが取れる”という項目に有意差があった。)対象者のエンパワメントを引き出したのはMTが毎回のセッションによりそれぞれのストレングスを強化していたことが要因の一つである。対象者が出した音や音楽をMTが「そのままのあなたで良い」「今のあなたで大丈夫」と、自己表現・意思表示として出された「私」そのものの音を受け止めて強化していた。この姿勢がノンバーバルコミュニケーションを通して対象者との確かなラポールを築き対象者を尊重していたことも伝わり、安心できる場として機能していた。セッションを対象者が信頼し、お互いを尊重しながら「私」を自己表現し自分の価値に気づき「私」の再認識・再構築を図り、それぞれの「生きる力」を高めたこともエンパワメントの基礎となっていた。

それは対象者同士の即興演奏において如実に表れていた。地域の文化である初午祭の「鈴掛け馬踊りの歌」を歌ってくれるCさんに対して多くの人がリクエストし、それに合わせてDさんは踊り、Eさんは合いの手を入れ、それ以外の対象者は手踊りや楽器演奏で盛り上げた。多感覚な刺激である音楽療法を楽しみながら、それぞれの対象者に内在する過去の記憶＝多感覚性が共鳴していた。その一体感と達成感を感じながら対象者同士のエンパワメントが発揮されていた。セッション後には回想場面での思い出やお互いの歌や踊り、楽器の演奏について褒め合う姿が見られ活発なコミュニケーションがセッションの場面以外でも行われていた。

5 「私」を引き出すノンバーバルコミュニケーションからコミュニティのエンパワメントへ

以上の検討に基づき音楽・日本語・哲学から捉えた「私」、

ノンバーバルコミュニケーションの果たす役割、個人それぞれのエンパワメントについて次の3つの段階に従って考察する。

第1段階：「私」の肯定(個人レベル)

第2段階：「私」の明確化(グループレベル)

第3段階：「私」と「私」によるエンパワメント(コミュニティレベル)

日本人においては日本語の構造自体に「私」を明確化せずに「私」を表出させるため、ノンバーバルコミュニケーションである音楽療法において「我一人」の会話を繰り返す活動は「私」を強化し、明確化させることになる。日本人は主語がないことを意識せずに日常の言語活動を行い「私」の言いたいことは述語に存在し、「私」を突出させずにその場の関係性において会話を行っている。そして「私」が明確化されなくてもお互いの会話は成立するのである。しかし心身に何らかの障害がある場合ノンバーバルコミュニケーションの1つである“音を出す”ことによって「私」を表現し、それを受け止める他者との双方向のコミュニケーションと成り得る。その音は「私」はここにいる、と自己決定された後に表出されるもので何にも代え難いものである。個人差はあるが心身機能が衰えていく高齢者にとっても十分に安全に行える活動である。音を出せない重度の障害がある場合においては、その場に居ること自体が「私」としての表現となっている。(耳の鼓膜は震えているが脳へ入力された刺激を出力することが出来ないために反応が見えていないからである。)

例えば、楽器での指揮はフロアタムを叩いている「私」が自己表現しながら他者を尊重し受け止めている。また、同時に指揮者役に合わせてリズムを一緒に叩いている「私」は指揮者との違いを認めながら「異質な他者を引き受け合う二人」(吉田2007:174)となっている。そして即興演奏(Cさんの歌・Dさんの踊り・Eさんの合いの手・それ以外の対象者全員での楽器演奏)では、お互いのエンパワメントによる「多彩な異多性の交響する共同性」(吉田2007:176)が行われていると考える。吉田はブーバーの1956年の論文「共同的なものに従うこと(Dem Gemeinschaftlichen folgen)」を引用し、これを解説している。「共同的な存在の現実において、他者に対してまさに汝と語りかけることが根本的に意味するのは、他者が根源的に他者として異なっていることの肯定、私によって受け入れられ私によって愛される異なった他なる存在の肯定である。それは、この同一化によって価値を失い、その精神において無に帰されてしまう。」「同じ

ところを共にする『共同性』ではなく、異質性(すなわち個性)を介して関わる「向かい合う二人」。他者と距離を取り、「他者の他者性」、他者の自己とは異なるところ、自他の異多性(個性)を介した関わり。」(吉田2007:176-177)なのである。(図2参照)

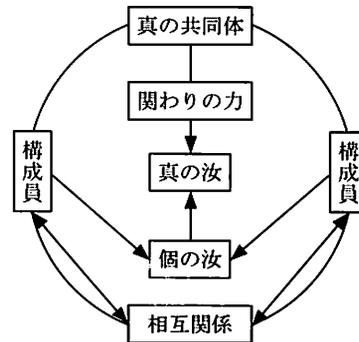


図2 「真の共同体」
稲村(2006)を基に園田が作成

つまり第1段階の「私」の肯定を行うことが第2段階の「私」を明確化し、第3段階の「私」とエンパワメントへと発展する。“個人レベル→グループレベル”へと進むことがエンパワメントの基礎となり、それが最終段階のコミュニティレベルに向かうことが「人間が社会的動物」であり人間が人間としての尊厳を保ちながら、真の「人間と共にある人間」として生涯を支え続けるものとなる。(図3参照)

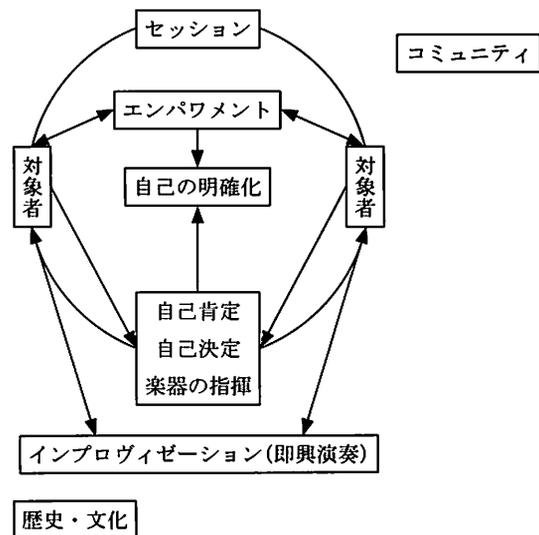


図3 音・音楽による「真の共同体」
稲村(2006)を基に園田が作成

謝辞

本研究ノート執筆にあたり鹿児島国際大学大学院研究科長の田畑洋一教授に温かいご指導、多くの助言を頂きましたことを、この場を借りて心より感謝致します。

注

- 1) マルティン・ブーバーは1878年にオーストリアのウィーン生まれのユダヤ系宗教哲学者、社会学者。ウィーン、ベルリン等の大学で哲学、美術史、歴史を学びユダヤ教関係の雑誌編集や翻訳の仕事を行った。1923年にフランクフルト大学教授になるも1933年にナチスにより退職させられ、その後1938年にエルサレムのヘブライ大学教授となる。1963年にエラスムス賞(ヨーロッパの文化、社会、社会科学への貢献を評価して毎年授与される賞)を受賞。1965年にエルサレムで没。
彼の哲学は“対話の哲学”として位置づけられ、我と汝の関係が根幹となっている。主な著書は『我と汝』*Ich und Du* (1922)、『人間という問題』*Das Problem des Menschen* (1943)等。
<http://ja.wikipedia.org/wiki/マルティン・ブーバー>
- 2) 音型(形)とは、若干の音をもって作られる特徴ある形で、音楽の最も短い構成部分である。それは、旋律的、リズム的、また時には和声的に表現される。

文献

- 浅香淳(編)(1977).『新音楽事典 楽語』東京：音楽之友社。
Buber, M. (1983). *Ich und Du*. Stuttgart : Reclam.
稲村秀一(2006).「ブーバーの哲学的人間学における『共生』の構造」岡山大学大学院文化科学研究科、『文化共生学研究』4 : 1-14.
金谷武洋(2010).『日本語は敬語があって主語がない―「地上の視点」の日本文化論―』東京：光文社。
園田和江(2010).「高齢者に対する音楽療法の生理的指標からの一考察―心身の活性化とストレスの緩和を中心として―」『鹿児島国際大学大学院福祉社会学研究科』。
園田和江・蓑毛良助(2008).「児童相談センターでの音楽療法の取り組み」『鹿児島国際大学福祉社会学部 児童相談センター年報』21 : 16-19。
園田和江・蓑毛良助(2010).「児童相談センターでの音楽療法の取り組み」『鹿児島国際大学福祉社会学部 児童相談センター年報』23 : 13-16。
上田閑照(1991).『西田幾多郎を読む』東京：岩波書店。
宇津木愛子(2005).『日本語の中の「私」―国語学と哲学の接点を求めて―』大阪：創元社。
吉田敦彦(2007).『ブーバー対話論とホリスティック教育―他者・呼びかけ・応答―』東京：勁草書房。

(そのほかずえ：鹿児島国際大学大学院
福祉社会学研究科博士後期課程)